

## 2018 年度事業報告書

当、公益社団法人マスコミ世論研究所は、2018 年度は以下のような事業を実施した。

### 1. 草の実アカデミー（諸分野における時事問題について、マスコミおよび当事者視点による情報の普及、及び世論の健全な形成を促進する事業）

当研究所の 40 年近くに及ぶ世論運動の蓄積を受けて 2007 年末に生まれた「草の実アカデミー」は、二分化社会の中で、本来あるべきアカデミズムとジャーナリズムの視座を、圧倒的な大衆（＝草の実）の日常の声の積み重ねの中に探してみたいと考えたものである。

在野の専門家達にスポットを当て、大衆の学びの場を提供する中での「草の実の世論」の錬磨を目指し、以下の取り組みを行った。

#### [1] 講演会、セミナー等の開催

##### ① 講演会・セミナーの開催

原則月 1 回の定例開催を行い(今年度は 10 回)、延べ 320 人が参加した。各回、1～2 名の内外講師による講義（60～120 分程度）と講義内容に基づく質疑応答およびディスカッション（60 分程度）で、以下の様なテーマを扱った。

- ・ 黒川敦彦氏（森友・加計共同追及プロジェクト共同代表）  
安倍政権後をどうするか（4 月 21 日）
- ・ 西道弘氏（元公安調査庁調査官）  
イスラムに改宗した元公安調査庁調査官が語る「共産党監視・旧ソ連関係・国際テロ関連情報分析、そして共謀罪時代の日本」（5 月 19 日）
- ・ 山岡俊介氏（ジャーナリスト）、寺澤有氏（ジャーナリスト）  
安倍晋三氏（あるいは安倍事務所）は、本当に選挙妨害を暴力団関係者（当時）に”発注”したのか？（7 月 28 日）
- ・ 関良基氏（拓殖大学教授）  
長州レジームからの脱却 2018 年のいま、テロリストたちに葬られた立憲主義を実現させる（8 月 18 日）
- ・ 渥美昌純氏（都政ウォッチャー）  
一難去らずにまた一難 ～東京都人権条例の危険～（9 月 22 日）
- ・ タケナカシゲル氏（フリーライター）  
「安倍首相・下関暴力団スキャンダルの現代史的検証」～警察・政治家・ヤクザの三角関係～（10 月 29 日）
- ・ 立石泰則氏（ノンフィクション作家・ジャーナリスト）  
「戦争体験と経営者」から読み取る 2020 年に向けていま起きていること（11 月 17 日）
- ・ 安田純平氏（ジャーナリスト）  
シリアから生還した安田純平氏が語る 1×1.5m の独房で息遣いも許されぬ監禁生活——『スラムダンク』『地球の歩き方』に救われた日々（12 月 15 日）
- ・ 外山麻貴（とやままき氏 youtuber、ピープルルパワーTV パーソナリティ）  
世界のダイレクトデモクラシーから学ぶ ～イタリア五つ星運動・スイス・スペイン・台湾の国民投票・韓国・・・～（1 月 19 日）

- ・ 寺澤有氏（ジャーナリスト）  
海上自衛隊イジメ自殺隠蔽工作 防衛省&記者クラブ&フリー記者 三つ巴攻防の今（2月16日）

## ② 講演会・セミナーのインターネット中継と動画の保存公開

講演会やシンポジウムはインターネットで中継し、映像をアーカイブとして保存、公開してきた。2018年度はセミナー参加者やネットメディアによる放送も多く、延べ1万2千人程度が視聴している。

## ③ ホームページやメールマガジンの運営

「草の実アカデミー・ブログ」や「草の実アカデミー・メルマガ」（今年度は25号を発行）を通じて、活動予定および実施した講演会等の活動内容についてタイムリーに広報し、テーマや講師陣などこれまでの実績を掲載した。また終了後の動画紹介や報告も掲載した。

## [2] マスコミ情報の収集・分析

### ① マスコミ情報の収集・分析及び調査結果の公開

ある時事問題に関する取材・著作などにおいて際立った業績を残している方や、中心的立場にある当事者へのインタビュー（取材）を行う。その調査結果は主に講演会・セミナーの企画に反映している。今年度は、アジアやヨーロッパの新しい政治運動を紹介するなど、海外からの視点を取り入れた。

### ② インターネット「世論カテレビ」局

新番組の更新はしていないが、過去の調査結果の一部について番組アーカイブやデータベースの提供は継続して行っている。

過去の調査結果の一部についてはインターネット「世論カテレビ」局で、番組アーカイブやデータベースとして提供している。

また、講演会などの映像資料の撮影・配信を参加者に依頼してインターネット上に保存している。

## 2. 一般市民が語る戦場体験の記録・保存・継承に関する事業（戦場体験放映保存運動）

### [1] 世論資料の収集、研究

#### ① 戦場体験のインタビュー記録の収集

体験者のインタビューは最も優先度の高い活動テーマである。

2018年度から3カ年を目安に、「『戦場体験 聞き取り全国キャラバン』の再出発」を掲げた。ハガキ付きのチラシを作成、会員ほか広く頒布して、改めて戦争体験者を募集した。

地方の体験者や協力者からの連絡、活動紹介記事への反響、地方紙掲載情報の掘り起こしなどで、2018年度は63名の体験の収録をすることが出来た。引揚げや空襲、戦争孤児など、従来より若い世代や女性の聞き取り機会が増えているが、100歳を超える3名を含め半数が元兵士・軍属である。関東圏以外では、福島、京都、兵庫、四国4県、福岡、長崎、沖縄本島・渡嘉敷島・座間味・阿嘉島で記録収集をした。

また介護施設での聞き取り促進のため、首都圏の施設に体験者の紹介や、チラシの設置を依頼

した。荒川区立の2施設はじめ、4施設から体験者をご紹介頂いたが、少数例であり、またご家族からの依頼で施設で聞き取りを行う場合に比べ体験者の年齢が若いなど、課題を残している。

### ② 戦場体験の語り・継承の記録の収集

継続活動として、(ア)当時の書類や写真、(イ)体験者による記録(手記、日記、著作、絵画など)、(ウ)体験者個人、および体験者の団体(戦友会など)が発行した書籍や冊子、(エ)戦場体験の語り・継承にかかわる活動の記録(講演会の記録など)を収集している。

2018年度は「戦場体験者が遺す証言とモノの展示会」を開催(詳細後述)。開催に当たって、改めて資料の寄贈や貸与を呼びかけたところ、体験者ご遺族を中心に応じて頂いた。またこの展示の様子が新聞報道されたことで、さらに多様な資料が寄せられた。

一方で体験者が亡くなれると、資料の散逸・破棄は予想以上で、引き続き積極的な取り組みを行いたい。

### ③ 戦後70年以降における戦場体験の継承のあり方についての検討

体験者なき戦後はいよいよ目前であり、また社会も体験者を介さない戦争の「語り」に移行していくと思われる。その中で戦場体験の継承はどうあるのが良いのか、体験者の証言記録をどう活用するのか、研究検討を重ねなければならない。

2015年、2016年とこれをテーマにシンポジウムを開催。現在行っている茶話会形式の催し(詳細後述)や、介護施設へのアプローチなどは、これらのシンポジウムの内容も受けての実践的な試みである。

また戦災孤児や残留孤児、心身の後遺障害を負った体験者の聞き取り、地上戦民間被害者の戦後補償に関する講演会(詳細後述)など、70年以上経っても現在進行形のテーマについても取り組んでいる。

## [2] 戦場体験資料の公開、継承(戦場体験史料館)

### ① 「戦場体験史料館・電子版」

2013年以降、電子版の拡張は微々たる状況が続いている。公開されている体験は153名、265名については公開用の文章の作成やご本人への確認作業を終えたが、Web化の作業がボトルネックとなり公開できていない。そこでサイトの一部にブログ形式を組み込むことを検証、作業の効率化が確認できたので、新年度はこの265名分の公開を進める。

また写真や物品などについてはtwitterを活用することで、公開の機会を増やしている。ただ体系的でなく検索にも適さないので、こちらもブログ形式を活用して「史料館・電子版」での公開を急ぎたい。

### ② “語り継ぐ”活動

#### (ア) 戦場体験者と出会える茶話会

2016年以来開催している戦場体験者との茶話会は、体験者の証言を間近に聞き、対話も出来る場として、幅広い世代に大変好評である。

2018年度は以下のとおり開催した。

◎戦災被害の元子供たちを囲むゆんたく 同時開催：体験談パネル展

7月14日(土)～16日(月・祝) 沖縄県立博物館・美術館(那覇市)

共催：沖縄戦・南洋戦民間被害者の会 後援：沖縄県、沖縄県教育委員会

沖縄戦や、移民先の南洋・フィリピンで地上戦を経験した 15 名が話し手として参加、うち 9 名が戦災孤児であった。

同時開催の展示では、沖縄・南洋における民間人の体験のほか、その後遺障害、同地での兵士・鉄血勤皇隊・女子学徒隊の体験を証言パネルや体験者の絵画、当時の写真などで紹介した。

併せて、沖縄戦・南洋戦被害の国家賠償訴訟の弁護団長である瑞慶山茂弁護士に、地上戦民間被害者の戦後補償の経緯と問題について講演いただいた。

約 300 名が参加し、市史編纂関係者、映像作家、社会学者、新聞記者などの参加も目立ったが、東京と比べると一般への浸透には課題を残した。

なお 8 月に開催された「沖縄戦 戦争孤児シンポジウム」(戦争孤児たちの戦後史研究会主催、沖縄大学)では、当催しを受けてゆんたく形式の導入が行われた。

#### ◎戦場体験者と出会える茶話会

9 月 15 日(土)～17 日(月・祝) 浅草公会堂 展示ホール(東京都)

話し手として 37 名が参加、来場者は延べ 700 名ほど、いずれも過去最大であった。一方会場やスタッフの容量を超え、茶話会本来の利点が活きなくなっている点も散見した。また体験者の参加が難しい戦地や、以前ほど詳細を語ることは難しい参加者も出てきており、今後の運営での工夫が必要となる。

なお参加者によって、自らのフィールドで「茶話会方式」の行事を企画する試みや、浅草茶話会の参加者を招いての行事などが実行されている。

#### (イ) 戦場体験者が遺す証言とモノの展示会

茶話会と同時開催 9 月 15 日(土)～17 日(月・祝) 浅草公会堂 展示ホール

体験者が持ち帰った物品や、当時の書類や写真、記憶を描いた絵画、戦死者の遺品など 180 点を展示した。モノの展示には出来るだけ同時期同じ戦地での証言パネルを併せて紹介するようにした。

特に、インパール作戦、フィリピンでの体験、伊江島の集団自決、シベリア抑留などを描いた絵画は、具体的なイメージが沸くのと同時に、描き伝えようとする体験者のエネルギーを感じると好評であった。

また「軍艦利根資料館」、「フィリピン日系人リーガルサポートセンター」にスペース提供をした展示も、来場者・展示者双方に好評で、今後も参加型の展示を提供できないか検討したい。

#### (ウ) 戦場体験聞き取りキャラバン報告展

8 月 14 日(火)～9 月 9 日(日) ナガサキピースミュージアム

全国で開催してきた「戦場体験キャラバン展」から抜粋したものを、初めて被爆地で開催した。常設館での企画展も初めてで、長期の開催が可能となった。また観光客も多いからと館からの要請で、一部の展示に英語の説明を加えた。

地元で語られる戦争体験は被爆が圧倒的なので、外の戦地での体験に触れたのは初めて、外地の体験も知る必要があると好評だった。

#### (エ) 交歓会の開催

元兵士と戦争を知らない世代のボランティアの交流の場を 3 月に開催した。

### ③ マスコミなどへの情報提供

今年度は以下のような情報提供や催し、取材への協力を行った。

- ・東京都北区職員労組 勉強会への体験者の紹介
- ・文京区「清林寺」講話への体験者の紹介
- ・テレビ朝日「ザ・スクープスペシャル 真珠湾 77 年目の真実」に証言映像を提供
- ・朝日新聞連載「消された戦争」 沖縄ゆんたくイベントで体験者を取材
- ・東京新聞 シリーズ「20 代記者が受け継ぐ戦争」に体験者を紹介
- ・河北新報 8 月紙面に特攻部隊経験者を紹介
- ・NHKBS「隠された日本兵のトラウマ」 体験者を紹介
- ・東京 MX テレビ 「サンデーCROSS」(8 月 12 日)に体験者を紹介
- ・AbemaTV「Abema Prime」8 月 13 日特番に体験者 2 名を紹介
- ・文化放送「大竹まことのゴールデンラジオ」 体験者を紹介
- ・朝日新聞 12 月 8 日関連記事にサイパン戦・孤児を紹介
- ・読売新聞 アッツ島慰霊参拝記事に写真提供
- ・読売新聞、朝日新聞 ノモンハン体験者を紹介

とりわけ「ザ・スクープ」は収録映像の活用で、今後もこういう機会を増やしたい。

また 2015 年に収録映像を提供して作られた BS Japan の「発掘！戦場の叫び ～元兵士 1500 名が伝えたい真実」が放送番組センターの「放送ライブラリー」で公開されることとなった。

### ④ 戦場体験放映保存運動に関する広報活動

(ア) 「史料館つうしん」の発行

2018 年 4 月、8 月(号外)、3 月に発行した。

以上